

総合科学研究所だより

Research Institute of Human Ecology, Literature and Education

巻頭言

総合科学研究所主任 渋谷 寿
SHIBUYA Hisashi

最近、日本の子どもたちの学力低下が話題になっています。世界の63カ国・地域が参加した、義務教育の途中段階で基礎的知識の定着度を見る、2011年、国際数学・理科教育動向調査（TIMSS）についての新聞記事（朝日、平成24年12月12日）がありました。それによりますと、日本の小学4年生の得点は、世界では4～5位でしたが、過去最高だったことと、文科省の「学習指導要領を改訂し、学習内容や授業時間数を増やしたこと、07年度からの全国学力調査の取り組みなどの脱ゆとりの成果が出てきた」との見解も掲載されました。その一方で数学、理科共に、小学4年生より中学2年生での勉強への意欲の低下も目立ち、成績は伸びたが、勉強への意欲や関心は伸びてないという事実が明らかになりました。

子どもの成績は、親の、子どもの勉強への関心や、家庭での予習復習にも深く関わっていると言います。今、様々な分野で大きな価値観の変換が求められていますが、未来の新しい価値観や科学技術を生み出す創造的な子どもを育てる上で、教育現場と家庭や地域社会との関係の中で、子どもたちの様々な意欲や意志を育てる術を考えることが重要ではないでしょうか。

総合科学研究所の地域貢献事業は平成18年よりスタートし、幼児から高齢者までを対象とした様々な企画を実践し、地域の方々にも高い評価を受けて参りました。子どもの勉強の成績を上げるということは、単に個別なことではなく、地域に根付いた活動から平均レベルを上げることにより、ひいては国としての総合的なレベルの向上につながるようになるのでしょうか。一つ一つの企画の積み上げがいつかは大きな成果に結びつくのではないかと思います。総合科学研究所の様々な分野の学際的な研究や企画が、子ども達の未来のために「学ぶ意味が重要」である事を伝える上で役に立つ事を願っています。

平成24年度 総合科学研究所「開かれた地域貢献事業」報告

（地域貢献（H24年度））家政学部食物栄養学科：片山直美、家政学部家政経済学科：神山久美、文学部児童教育学科：竹尾利夫・渋谷 寿代・宇野民幸・堀 祥子、短期大学部保育学科：平井仁子・森 久見子・幸 順子・中村三緒子、短期大学部生活学科：宮澤秀治・榎本雅穂・北川剛一・原田妙子代・石毛恵美枝・成田公子・松本貴志子・坂野朋子・武岡さおり、名古屋女子大学同窓会「春光会」：小原玲子・大橋益子・奥山育子・構実千代・杉浦久仁子・鈴木美保子・中島和子・早川千鶴子・宮川富美子

本研究が推進する「開かれた地域貢献事業」として、地域の公共施設である名古屋市瑞穂児童館と名古屋市瑞穂保健所の両公共施設とのコラボレーション事業は、24年度を無事終えることができました。大学ならではの講座になり、今年度もリピーターの方が多く参加して下さいました。瑞穂児童館との交流事業は児童館祭りのイベントを含めて、保育・教育、栄養・生活関係の7つの講座と児童館クリスマスイベントを開催。また、瑞穂保健所との交流事業は「若返り教室キラキラコース（平成24年度認知症・うつ予防教室）」を支援する形で、5つの企画を行いました。これらは春光会、文学部児童教育学科、家政学部食物栄養学科、短期大学部生活学科の教員と学生の有志、および総合科学研究所の教職員が協力して実施し、お年寄りの方々に元気をいただきました。（文責：原田妙子）

①名古屋市瑞穂保健所との交流事業

平成24年9月～平成25年2月

平成24年度認知症・うつ予防教室

「若がり教室キラキラコース」（汐路学舎で実施）

「作ってみよう!! 世界に一枚だけ!! オリジナルTシャツを作ろう!!」、「元気いっぱい健康食事! いつでも誰でもできる簡単料理」、「歌ってみよう♪～永遠の英語ポップス～」、「薬膳料理に挑戦! 「おいしく食べて健康に」味覚と嗅覚を刺激して脳を活性化しよう」、「作ってみよう!! 香りのよいヒノキを使って木工作品」

②名古屋市瑞穂児童館との交流事業

①クリスマスイベント「第4回クリスマスを皆でたのしもう!」

平成24年12月15日（土）・16日（日）

イルミネーション、「オーナメントクッキーをつくろう!」講座、各種イベント「みなさんとクリスマスを楽しみましょう」「本の世界を楽しむー自分だけの絵本をつくってみようー」「さっかくホール」「クリスマスのオーナメントをつくろう!」「英語でクリスマスソングを歌ってみませんか」

②交流事業の各種講座 平成24年10月～平成25年3月

「乳幼児の食育相談」「おいしく食べて野菜と仲良し」「パソコンでクリスマスカードをつくろう!」「子育てグループ教室ー保護者の交流と親子遊びー」「羊毛フェルトをつかってカラフルおとだまをつくろう」「おこづかいについて考えよう」「ひなまつりの伝統菓子「おこしもの」作り」



オリジナルTシャツづくり



永遠の英語ポップス



食育相談



おいしく食べて野菜と仲良し

機関研究

「創立者越原春子および女子教育に関する研究」

～女性をめぐる教育と政治の相互関係（19世紀～20世紀前半）～

石倉瑞恵・氏原陽子・木原貴子・遠山佳治・羽澄直子(代)・吉田文・依岡道子

本機関研究が始まって第四期（平成23年～24年）の最終年となる平成24年度は、メンバー個々の研究に加え、名古屋高等学校校友会（同窓会）の刊行誌『會誌』を閲覧し、デジタルカメラの撮影によるデータ保存作業をおこないました。

『會誌』の創刊は昭和3年2月15日です。昭和17年12月25日の最終15号まで計14回発行されています（11号は未刊行。14号の誌名は『團誌』、15号の誌名は『名高女學園だよ里』）。その内容は教員や卒業生の寄稿が中心です。卒業生からの便りには近況報告に子どもの写真が添えられているものもあり、母親としての喜びや誇らしさがうかがわれます。また卒業生にはなつかしい学校の様子も

多々紹介されています。

校友会会長でもあった越原春子校長は、創刊号の発刊の辞を始めほぼ毎号に文を寄せています。教員への質問コーナー「先生の答案」で愛読書を問われると、春子校長は「英雄、偉人、名婦、女傑の伝記」を挙げ、その理由を「読むごとに血湧き肉躍るの思ひをなし、自己修養上にも子女教養のためにも必須の読物であることを痛感致します」（10号）と記しています。「内面強い自主自活の精神に燃え立つ」（2号）新しい時代の女性の望まれる姿について語る春子校長の言葉は常に力強く、卒業生を励まし続けています。

(文責：羽澄直子)

機関研究

「大学における効果的な授業法の研究6」

～『学士力』育成のための教育方法の検討～

氏原陽子・神山久美・白井靖敏・清道亜都子・遠山佳治(代)・羽澄直子・原田妙子・幸 順子

本研究は、平成13年度から研究所機関研究として継続しています「大学における効果的な授業法の研究」（1情報教育、2語学教育、3教養教育、4初年次教育、5評価方法）の一環として位置付けられ、平成24年度～平成26年度の3年間かけて、本学学生を対象とした「学士力」育成のための教育方法を検討し、本学の授業改善に応用可能で、有用性のある実践的研究です。

なお1年目の今年度は、本学における状況を把握するため、教員（専任教員・非常勤講師）対象に「学士力育成のための授業実践に関する調査」の企画および準備を進め、平成25年1～2月にアン

ケートを実施しました。その調査内容は、中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」に示された「学士力」として挙げている項目について、専門科目・教養科目などの授業を通しての意識の程度および実践例を提示してもらいました。また、授業を通しての「学士力」養成の方法や、学生主体の授業についての考えもお聞きしました。現在は回収したアンケート用紙の処理作業中で、2年目の来年度は他大学の状況と比較検討しながら、本学の分析を進める予定であります。

(文責：遠山佳治)

機関研究

「幼児の才能開発に関する研究」

～遊びの中の学びⅡ～

幼児保育研究グループ

「遊びの中の学び」に焦点をあてた取り組みも、2学期以降さらに充実し、遊びの展開と個々の目的意識を持った遊びの工夫の育ちを確認することができます。園内研修では、遊びについて実態を記録化することで、より具体的な展開と課題を探る機会としています。そこでは、様々な角度から子どもがどのように遊びを深めているか、その中での育ちはどのようなことかを視点とした意見交換を行います。その結果、教師は遊びの見方や気づきが確かな捉え方に向かい、自身の意識の変革にも結びついています。日常行われる鬼ごっこなどの集団遊びは、一年を通じ行われ、子どもの中から発展している遊びのひとつです。繰り返しの中で子ども自らルールを考え独自の展開をしています。そこには、遊びが子ども自身のものになり、楽しさや充実感を感じているからこそ生まれる学びの意味が含まれていることを意識し、実践研究を継続中です。

(文責：森岡とき子)



鬼ごっこあそび

機関研究

「中学生の学力向上に関する研究」

～主体的な学びを促す授業の研究―「学ぶ」楽しさを実感できる授業展開のあり方～

中学校学力向上研究グループ

今年度は「主体的な学びを促す授業の研究～「学ぶ」楽しさを実感できる授業展開のあり方～」をテーマにこの1年の研究活動を進めてきました。

研究会及び研究授業については、5月・第153回研究会、8月・夏期研究合宿、研究授業（数学）と第154回研究会、10月・研究授業（国語）と第155回研究会、12月・研究授業（英語）と計4回実施してきました。

さらに2月27日（水）には、今年度最後の研究授業（社会）と通算30回目となる研究発表会を開催。山本暁太教諭による研究授業（社会）に関する発表を、特に「協同学習」の部分を中心として、また福田誠教諭が昨年度までの実践とからめた形での実践報告を行い、続いて奥村彰敏教諭が本年度の研究活動のまとめとして、総括の報告を行いました。まとめの中では教科に分かれてのディスカッションも行い、主体的な学びをどのように進め成果を得ていくかということについての問題意識を共有する時間となりました。

(文責：福田 誠)



研究授業

機関研究

「高校生の学力向上に関する研究」

～思考力を高める授業のあり方～

高等学校学力向上研究グループ

高校生の学力向上を目指し、総合科学研究所と連携した研究活動も今年度で6年目を迎えました。私たちが研究に取り組むきっかけは「学力を向上させる」ということから始まっています。そのためには、各教科の特性を考慮しながら「思考力を高める授業のあり方」を深める必要があり、昨年度から引き続きテーマに掲げて進めることとしました。本年度は、11月と3月に文系科目（英語と国語）に特化した全教員参観の研究授業に取り組みました。その中で、生徒たち一人ひとりが自分の力で考えなければならない状況をつくることを意識した授業づくりを目指しました。

一方、研究会のメンバーは「思考力」を育むために「生徒が主体的に取り組む」ということをキーワードとして様々な研修・研究会に参加しました。また、12月22日には小石川中等教育学校および上智大学非常勤講師の新井明先生をお招きして講演していただき、日々の授業を見つめ直す機会を設けました。

(文責：野中知里)



研究授業

プロジェクト研究

「実験を取り入れた参加型理科教育の推進に関する研究(その2)」

市原千博・宇野民幸・吉川直志代

平成23年度プロジェクト研究に引き続き、名古屋女子大学の文系学生に対して、物理や科学のおもしろさを伝えることを目指した実験を取り入れた参加型授業の方法を実践しました。本年度は、文学部の「現代科学の様相」、自然科学の「自然科学概論」、家政学部の「生活の物理」の授業において、身のまわりにある簡単な材料を使ってみんなが参加できる実験を多く取り入れました。身近にも物理や科学のおもしろさを感じられるものがあふれています。それを知ってもらうことで、文系学生の物理分野への垣根を低くすることができます。

本研究の参加型授業により、「分からないからさらい」という悪いイメージを無くして、興味を持たせることは可能であることが分かりました。物理や科学の不思議な現象も、自ら手を動かすことでその理由を理解できます。そこから次の疑問が生まれ、理学的、科学的思考が生まれてくることも分かりました。この研究成果をふまえ、理科系授業に積極的に取り入れていくことがこれからの課題となります。

(文責：吉川直志)

平成25年度プロジェクト研究

「教員養成校における創造的思索の構築のための教育カリキュラムの検討」～芸術・哲学・心理の観点から～

塩見剛一・堀 祥子(代)・命婦恭子

教員養成校を卒業した学生は、保育者及び小学校教員として子どもや保護者、地域住民とかかわりを持つとき、何かを共有し分かち合うことの喜びや達成感と同時に、そのプロセスに対してこれまでの社会情勢では考えられないような不安や問題を抱える可能性を伴います。そこで、その解決策を主体的かつ創造的に自分の頭で考え、自身の内側から出る確かな言葉で、人の心に寄り添

いながら提案できる人材の育成が必要であると考えます。ゼミ活動を通じ、例えば織りなどの創作中の「無」の状態を哲学的にとらえると？などを問いかけ、発話を促すことで思索を深めることが可能か、発話回数等から心理的に調査し、教育カリキュラムへの援用の有効性を検証していきます。

(文責：堀 祥子)

「初等英語教育教授法についての研究」～小学校教員の授業力・教育力を活かす小学校英語活動法～

木原真子・ダグラス・ジャレル(代)・羽澄直子・服部幹雄

平成23年度から小学校での「外国語活動」が必修化され、他教科と同じように「英語」を教える機会の増えた日本人クラス担任のための英語活動実践報告や活動法の開発が活発化しています。しかしその教授法の多くは外国での研究や日本の中学校の英語教育を基にしたもので、小学校の先生たちの知識や経験と英語活動をリンクさせる試みは少ないようです。本プロジェクト研究

ではそのリンクに焦点を当て、小学校の様々な教科の教授法などを活用した英語活動法や教材の探求を目的とします。

平成25年度には文学部児童教育学科児童教育学専攻のカリキュラムに「初等英語教育を支える科目群」が加わります。本研究の成果がこの科目群の実践に反映できるものとなるよう取り組んでいきます。

(文責：羽澄直子)

「保育者養成の為の表現授業における指導方法の研究」

清道亜都子・松田ほなみ(代)・三輪亜希子

保育者には、幼児に創造力や自発性を促す力が求められます。そのため、本学短期大学部保育学科では、カリキュラムに保育と教育の内容・技能の分野が設けられています。学生は、2年間で指導者として成長する必要があり、1年で基礎を修得し、2年で応用する力を身につけます。幼児に創造力や自発性を促すには、学生自らが創造力や自発性を養い、表現することを体験する必要

があると考えます。2年後期で設けられている総合表現演習は、身体表現と造形表現を合わせて指導を行います。それに、1年次で紙芝居のお話づくりをおこなった言語表現を加え、身体表現、造形表現、言語表現の三つの領域で学生が表現する力を最大限生かすことができるよう、研究を進めていきます。

(文責：松田ほなみ)

総合科学研究所主催 平成24年度 大学講演会 (9月20日)

「キャリア教育の現状と展望」 講師：宮崎冴子氏 (三重大学学生総合支援センター特任教授)

平成24年9月20日(木)に開催された研究所主催の大学講演会は、三重大学学生総合支援センター特任教授の宮崎冴子先生にご講演いただきました。

講演会では、はじめに若年者の職業意識とキャリア形成に関して、精神的・社会的自立の遅れ、コミュニケーション能力の不足、3年以内早期離職者の急増(2003年 大卒36.6%)、フリーター(15~34歳層)の長期化傾向、そしてニート(若年無業者)の現状と問題点についてお話をいただきました。また、米国やEU主要国(ドイツ、イギリス、デンマーク、フィンランドなど)のキャリア教育の歴史にも触れ、日本の職業指導から進路指導を経て今日のキャリア教育までの経緯についてもお話いただきました。

宮崎先生は、キャリア教育を“生き方教育”として捉え、学生が自分らしい生き方を選ぶ方向へ発想転換し、主体的にキャリア形成・能力開発ができるように、家族や教職員が協働して支援活動をする必要性をご指摘くださり貴重な講演会となりました。(文責：辻原命子)



平成24年度 大学講演会

第6回 高等学校教育講演会 (12月22日)

「生徒の主体的な取り組みを促す授業の在り方」

講師：新井明氏 (小石川中等教育学校非常勤講師、上智大学非常勤講師)

教育講演会では、小石川中等教育学校および上智大学非常勤講師の新井明先生をお招きして「生徒の主体的な取り組みを促す授業の在り方」をテーマにご講演いただきました。講演の中では、新井先生が実践されている取り組みの紹介をはじめ、フェアトレードのチョコレートと市販品のものを実食し、「人は思想のみで生きることができるか?」という切り口で利他性、共存などについて考えました。

その中で、生徒の主体的な活動を高めるための教材には、①興味・関心を高める ②切実感を持たせる ③少し背伸びをさせる ④足元から全体へ という4つの側面が必要であるという提案がありました。そして、適切な教材を扱うことによって生徒の思考力が高まるということを再確認しました。また、共に働く教員間の意見交換や、生徒とともに楽しみながら学ぶ心のゆとりが、結果的に生徒たちの大きな成長につながることを知りました。講演会は生徒の思考力を高めるヒントを得るだけでなく、教育の難しさをあらためて実感する良い機会となりました。(文責：野中知里)



第6回 高等学校教育講演会

総合科学研究所「開かれた地域貢献事業」に参加して

瑞穂保健所との交流事業「若がり教室キラキラコース」

「作ってみよう!!世界に一枚だけ?! オリジナルTシャツを作ろう!」

きらきらコースにボランティアとして参加しました。最初は何を話せばよいかわからず、恥ずかしがりながらの作業でしたが、私が試しにTシャツの材料を並べると、お年寄りの皆さんも思い思いに材料を並べ始め、次第に「こうの方がいいかな?」、「こういう風にできるかな?」と質問してくださるようになりました。皆さんとても明るくお元気で、私もとても楽しかったです。最後に1人1人作品を持って発表をしましたが、どれも素敵なデザインで、皆さん笑顔で発表されていた事がとても印象的でした。

短期大学部生活学科3年 武政嘉奈

瑞穂児童館との交流事業

「羊毛フェルトをつかってカラフルおとだまをつくらう」

- 今回のワークショップに参加させていただいて、母親が子どものために玩具を作ることを通して、同世代の子どもを持つ母親たちの交流の場にもなっているのを知ることができました。
- また、母親は私たちが想像していたよりも子どもの動きに敏感であり、母子ともに楽しんで活動に参加できるように、安全面においてもっと配慮すべき事があると思いました。そして、スムーズに活動がおこなえるように、スタッフが作業手順などをもっと把握することが大切であると感じました。

児童教育学科幼児保育専攻2年 大石 茜

今年度運営委員

委員長

原田 妙子
HARADA Taeko
(短期大学部)

伊藤 充子
ITO Mitsuko
(文学部)

辻原 命子
TSUJIHARA Nobuko
(家政学部)

羽澄 直子
HAZUMI Naoko
(文学部)

宮澤 秀治
MIYAZAWA Shuji
(短期大学部)

研究所メンバー

所長

竹尾 利夫
TAKEO Toshio

顧問

河村 瑞江
KAWAMURA Mizue

主任

渋谷 寿
SHIBUYA Hisashi

講師

越原 もゆる
KOSHIHARA Moyuru

職員

寺島 まり子
TERASHIMA Mariko

編集後記

ここに総合科学研究所だより第16号をお届けいたします。ご執筆下さいました関係者の皆様に感謝申し上げます。本号では研究所の、1年間の事業内容をお伝えしました。情報化が進む社会の中で、ハード面は著しく進歩しています。しかし、ソフト面の仕事も見落としてはいけないでしょう。それらが調和する学際的な探求が、今後の総合科学研究所の使命の一つかもしれません。研究所の意義をご理解いただき、ぜひこれからの事業にもご協力下さいますようお願いいたします。

文責：渋谷 寿